

部会活動の歩み

機関誌編集と建設業部会の活動

中 村 優 一

1. はじめに

日本建設機械施工協会創立 70 周年に当たりお祝いを述べさせて頂くと共に、「各部会活動の歩みと今後の展開」の中から私が経験した編集委員会と建設業部会において最も印象に残った事をお伝えし、今後の部会活動の展開に多少なりと味付けになれば幸いです。

2008 年から 2018 年迄（途中 1 年の休憩をはさむ）日本建設機械施工協会の編集委員を経験できたことと、たまたま私が弊社の機械部長（東日本支社）であった期間内に建設業部会の副幹事長の役割が回ってきたため、ダブルでよい経験が出来たと感じている。

今思えば、弊社の西日本支社から東日本支社に移動したその年から日本建設機械施工協会の委員を前任者から継承し、協会活動など全くの未経験であり、社内外でどのような動きをすればよいのかも分からない中、“人と同じことはやりたくない”の大それたというよりもひねくれた独自の人生観で向かって行き、結果的に何とか実現出来たことなどを思い出話としてお伝えする。

2. 編集委員会

(1) 投稿実績

編集委員会の経験を語る前に 2008 年迄の当人の機関誌等への投稿実績を紹介すると

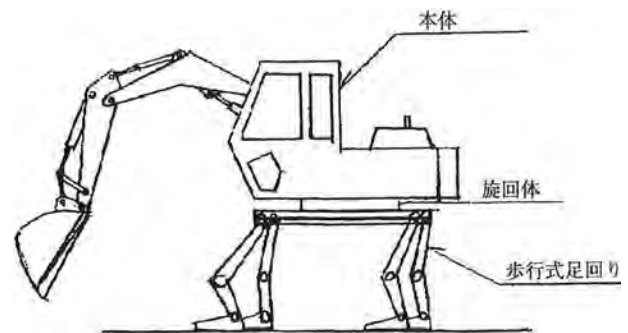
- 1) 21 世紀、あれば便利、こんな建設機械—若手技術者のアイデア募集への“歩く掘削機”の考案：「建設機械」2000 年 8 月
- 2) “鈴蘭台汚水幹線工事の TBM による急勾配施工”：「建設の機械化」2001 年 1 月の 2 件だけであった。

“歩く掘削機”については弊社関西支社に在籍時、こんなアンケートが来ているがお前が代表して提案してみると言われ、何か極端なものはないかと考えて投稿したものであるが、TBM の急勾配施工については

現場担当機械職員に代わって論文を作成しただけのものであった。

2008 年 4 月より東日本支社に転勤となったのであるが、出だしから自分の性格が出てしまったのが編集業務であった。

当時の手書きの投稿図“歩く掘削機を図—1 に示す。



図—1

(2) 宇宙飛行士へのインタビュー～筆者の思い出～

2008 年 4 月から編集委員となり、まず大きく戸惑ったのが既にその年の 10 月号の担当となっていたことである。次の 5 月の委員会には“編集方針”を発表しなければならない。また、ペアを組むもう一人の経験者の方から「今年は忙しいのでメインでお願いします」と更に追い打ちを掛けられる始末であった。

ところが、そんな急を要する業務を請け負っておきながら、“ずいそう”をこれまでと違った人をお願いしてみたいという悪い癖が出てしまい、編集方針でずいそうを宇宙飛行士にお願いしたいと発表したところ、てっきり未だかつてないことで難しそうだから、こちらからも打診してあげましようという委員長からの言葉を期待していたのであるが差にあらず、委員長からは「よろしくお願いします」の一言で終わりであった。（最近では結構気軽に JAXA 関係者に原稿をお願い出来ているように見受けられる）

当たるだけでも当たってみようという気で丸の内の JAXA へ飛び込みで行ってしまい、何とか部屋には

入れて貰えたのであるが、セキュリティーが非常に厳重な雰囲気の中、完全に諦めの気持ちで来客席でかなりの時間待っていたところ、女性のキャリアのような主任クラスの広報担当の方が対応に出て来られ、機関誌の位置付けや内容・今回の目的など詳しく尋ねられ、その結果宇宙飛行士は毎日の訓練で非常に忙しいため現役は無理である、但し次期候補の古川宇宙飛行士であれば可能かもしれないとの返事を頂き、自分でも驚いたことを覚えている。その後何回かのメールや電話でのやり取りの結果、ソ連で訓練している合間の30分だけ電話インタビューという形で実現可能となった。

その後インタビューに関する企画書を提出しろとかクレジットの証明とかこれまで経験したことがない訳の分からないものを要求されたりしたが何とかクリアし、実際のインタビューに漕ぎつけることが出来た。この間編集事務局や印刷会社の協力も得られることになり、インタビューの場にボイスレコーダーを持ち込み、そのレコーダーから印刷会社が所有するソフトによって文字化してくれることとなった。

インタビュー当日丸の内のJAXAに行ってみると約束の時間より少し遅れそうだと恐れ不安を抱えながら待っていたのであるが、丁度30分遅れで古川飛行士と繋がる事が出来た。そこで想定問答集ではないが、こちらで用意しJAXAが検収済みの内容でインタビューを始めたところ予定時刻を経過しても古川氏がまだ答えようとするためJAXAの同席の広報担当主任に目で確認したところ、古川宇宙飛行士は最も優しい人で本日遅れたから申し訳ないので後の方に多少遅れてもよいということらしいと言われ継続することが出来、結局約40分のインタビューとなった。古川飛行士は小さい頃ウルトラセブンになりたかったと言っていたため、私が「ずいそう」のタイトル(仮称)を「ウルトラセブンになりたかった」と付けたところJAXAがチェックして帰ってきたものは「宇宙」となっていた。

インタビューの最後に私が図に乗って「宇宙に行ったら恒例で日本の子供たち等と交信しインタビューを受けてくれる場面が出来ると思うのですが、その時もしよろしかったら「奥村組の中村さん元気ですかと言って貰えますか」と面白半分聞いたところ「公の電波を通じてそれは無理です」と真面目に答えられてしまった。広報担当主任さんは笑っていた。

それから3年後の2011年6月古川宇宙飛行士が実現し、滞在するISSから地球の日本の子供たちとの交信が現実のものとなったが、「奥村組の中村さん元気

ですか”は期待すること自体が無謀であった。

その後が実際は大変であった。印刷会社から送られてきたインタビュー録はA4—7頁で、どんなソフトかは知る由もないが印刷会社も声を正しい文字にするには相当苦勞されたようで、このようなやり方は今回限りに願いたいと事務局を通じて達しがあった。最終的には私が短く編集し機関誌に掲載したのは2頁であった。

忘れもしないが、その時の丸の内のJAXAの広報担当者の決断の速さと親切な対応に胸を打たれた感があった。

3. 建設業部会

(1) 三役会の活動～筆者の思い出～

建設業部会での思い出は何と言っても2011年～2012年のY幹事長(S建設)との出会いである。

弊社の社内では見たことがない素晴らしい企画力の持ち主であった。現在も存在する“機電技術者交流企画WG”及び“ドラグショベル吊上げ作業事故防止検討会”を立ち上げたのもこの年からで発案は2011年に就任したY幹事長である。当時の建設業部会幹事会社は部会長、幹事長を除いて16社であったが、その16社を2つのグループに分け今年度から活動して行こうというものであった。

この年からY幹事長の提案で三役会(部会長・幹事長・副幹事長—全部で5名+事務局2名)は月1回以上行うこととなり、その席でWGの発足等を決議し、年2～3回の幹事会或いは建設業部会において承認を頂くという形で進めていった。

私は機電技術者交流企画WGのメンバーとなったが、このWGはY幹事長からの事前の課題も多く結構忙しく活動することになり、この会も結局1回/月で実施したと記憶している。“何のために毎年2日間掛けて建設会社の機電職員を募って意見交換会の様な交流会を行うのか”、“毎年テーマは有るが、しっかり検討した上でのテーマとなっているか”、“毎回1～2件講演が恒例となっているが意味のある講演となっているか、また、講演自体有意義であるか”といった具合であった。

(2) 機電技術者交流企画WGの活動～筆者の思い出～

当時の機電技術者交流企画WGのメンバーは全員が各社の機電部長で有り、各社の機電職員の将来を考える責任者の集団であった。

各社の部長さんが色々な意見を言うのであるが、それが社風から来ているのか、それとも個人の考え方から来ているのか、本来であれば各社の会社としての意見が要求されるのであろうが、実際には個人的な意見だと思われがちな内容が多かったように見受けられ、自分も同様であったため本来の姿というよりも、どちらでも良いのかなという感じであった。

事例としては、極端な意見を言うあるゼネコンの部長さんがいたが、次の代の人と同じ会社の同じ立場でありながら、全く異なった意見であったりということもあった。

殆どのゼネコンの機電部長さん、また、国土交通省の機械施工部門の方々や弊社の土木部門の諸氏が口を揃えて「現場に配属されたら、機電主任ではなく現場所長を目指しなさい」と言うのであるが、あるゼネコンの機械部長さんが「私の会社の機電職員にはそんな教育はしていない、あくまでも立派な機電主任になることを最終目的とさせている。もし先程の様な現場所長を目指そうという話題が出るような集いであれば、当社からは参加させない」と発言されたのには、異なった考え方があるのだなあとと思う以上に啞然としてしまったというのが正直なところであった。

この年の機電技術者意見交換会（第16回）は時間を掛けて多くの検討を行った結果、従来より変更した事項が何点かあったので以下に紹介しておく。

- ・遠方からの参加者に配慮し開始時間を9時00分から11時00分に変更
- ・グループ編成をこれまでの若手&ベテラン混成から年代別を基本に変更
- ・但し、2日目の1時間だけ情報交換の目的で混成グループ方式とした。
- ・この年の3月11日に東日本で大きな災害が発生したため講演を「首都直下型地震における機械施工協会との災害協定について」と題して国土交通省の施工企画課長にお願いした。
- ・CPDSポイント取得の対象とした。
- ・上記変更を決定するに当たり建設業部会会員各社に事前にアンケートを実施
- ・第16回以降もずっと継続されてきた機電交流企画WGでは、討議テーマの見直しだけでなく討議する班をシャッフルし、平均年齢別の班作成なども行い、参加者同士が漫然なく意見交換を行えるように工夫した。

近年では、AI、ICT、IoT、情報化施工、i-Constructionや生産性向上、働き方改革等時代に沿ったキーワードを意識し、参加者がより有意義に討議が行えるテーマ

提供や講演会を実施。2019年度も第23回として「機電技術者はAIとどう付き合っていくべきか」をテーマに開催が決まった。

(3) 機電職員への支援

この機電技術者交流企画WGにおいても建設業界における機電技術者の地位の向上についてが常に話題として取り上げられた。取り上げられたという事は、弊社だけでなく殆どの建設会社、特にゼネコンにおいて機電職員はたとえ総合職であっても主流ではなく支援担当或いは縁の下の力持ちとなっている状況は否めないという事であった。

実際には建設会社に入社してからこの話題に触れることになるのだが、何故機械工学を専攻しながら建設会社を選んだのか、学生時代上位ではなかったため所謂エリートコースを外れた形でも何とか会社員という立場を確保しようという表立っては言い難いがそれに近い理由も結構あるのではないか。

ただ、例外も見受けられる。人格も能力もどう見ても主流よりも上であるが、機電職員として入社したことで、役割と立場が制限されてしまっている。また、制限から飛び出せた人格者においてもそれには主流と比較すれば格段の努力が必要であったことは想像に難くない。

4. おわりに

筆者の経験や記憶、その後の部会の中でも度々上がるこれらの話題は、多分各社が現在でも抱えている『課題』であろうかと思われる。最近では好ましい事例としてシールド工事等、工種によっては機電職員の立場（重要性）を論ずる必要性も減っている場面も見受けられるが、残念な事に大概そこには、「各社それぞれの考え方や異なる方針」が既に横たわっているのが実態である。本建設業部会主導で、『機電職』を通してより建設業界が希望に繋がる何らかの方法を見出すことが出来ればと、OBとなった今でも引き続き思案している次第である。

■その他直近10年 建設業部会の歩み■

- ・ドラグショベル吊上げ作業事故防止検討会：『バックホウ（ドラグショベル）の吊上げ作業に関するアンケート調査報告書』（2014.02 終了）
 - ・建設機械事故調査WG：『建設機械（クレーン以外）の事故・災害事例分析報告書』完成。
- 並びに157件の「建設機械の事故・災害事例」のデー

- データベースをHPに公開。(2017.06)
- ・機電技術者交流企画WG：機電技術者意見交換会の他に、人手不足が加速する業界の為に『建設業界（機電職）就職活動用ガイド』を作成，販売開始。(2017.03) 現在2019年12月に向けて改訂中。
 - ・クレーン安全情報WG：(一社)日本クレーン協会，(一社)全国クレーン建設業協会，(公社)ボイラ・クレーン安全協会が主催する「移動式クレーン運転士安全衛生教育」で使用される事故事例教本『移動式クレーン 災害ゼロに向けて』を本WGメンバーで改訂。(2014.12)。現在2020年3月に向けて改訂中。『クレーン・関連事故・災害情報』をHPに公開。(2017.12)

- ・機電 i-con 現場 WG：i-Construction 及び ICT 施工に関する施工業者の生の声，並びに近年普及している ICT を活用した建設現場の安全技術に関する生の声を収集分析し，部会への提言を目的に活動。『機電 i-Con 現場 WG アンケート結果について』にて成果報告 (2019.03 終了)

【筆者紹介】

中村 優一 (なかむら ゆういち)
建設業部会 元副幹事長
元(株)奥村組 機械部

